

春燈

9月号



櫻桃子の句

子の折鶴千超ゆるとも春遠し

自註現代俳句シリーズ・ 期『成瀬櫻桃子集』昭和五十二年

美菜子さんは折鶴を幾つ折られたのでしょうか。無心に折り続ける娘（十七歳）の姿を見ながら、以前北海道で見た雪中の鶴の姿を思い浮かべての作品と拝察されま
す。師は鶴の舞を美の極致と言いつつ切りました。自然を觀
ながらその裏に人生の言い尽くせぬ叙情を、十七文字に
託されました。初めに 菜の花や近江に多き觀世音の
句を思いました。古寺散策の師のお姿も好きです。

加藤 良子

櫻桃子の句

古曆人は忘るる知恵もてり

『成瀬櫻桃子句集』平成六年

あの人は都合よく忘れる、とは老人について言われてきた悪口である。しかし、これはどうやら老人に限らぬことのようにだ。日常生活においても、自他の人生を左右したような事柄においても、人は「適当に忘却」という天与の杖を頼りに現在を生きてゆく。二十世紀の或るユダヤ系アメリカ人の作家は「記憶力ではなく、忘れる能力こそ生存のため必須の条件である」とまで言っている。

伊賀山ひでを

主宰の句

西ヶ原日記 (十)

鈴木榮子

苦界より逃るるは死か女郎花

死して墓のひしひし並ぶ木下闇

大き茅の輪ふた二重へにくぐり納めけり

間引かれぬ枇杷も供養の実のたわわ

庚申待ちの夜が明けこぼれ蛇苺

東京の盆は七月寺普請

編集長と

櫻桃子先生盆花の対供へけり

河童忌や豎川横川従へて

踏切の爪先上り西日落つ

蘭草草履素足の指を喜ばす

木石

太田具隆

わが組める石の苔咲く面映ゆし
つるくさのつるのすらりと梅雨晴間
松青く竹なほ青く梅雨深し
鋏研ぐ涼し涼しと鋏むべく
敦忌や庭師の汗をひもすがら
箱庭のあの日に還る土いぢり
あばれ檜剪り透かし来て冷奴
打水の音を呑み込む池の鯉
竹煮草一所懸命ぬきんづる
木石と共に秋待つところかな

出会ひまつり

山下千鶴

大鳥居浮き立つ夜の新樹かな
神苑にみこしの綺羅の揃ひけり
ご神馬曳く家系歴代くつわ取り
神輿渡御始まる灯り暗うせよ
千貫神輿ゆらりとけやき並木かな
大鳥居出るやすなはち荒神輿
踏ん張つて脚・足・あしの神輿かな
お神酒所は老の守れる夜の新樹
世話人の呂律あやしきまつり酒
お旅所や夜半鎮まれる二ッ神輿

当月集

鈴木 榮子選



市川 玲子

金子 輝

カフェーに父を探しし「父の日」来
立版古父に負はれし九段坂
梅雨ごもり「紅屋の娘」と蓄音器と
梅雨晴間町にコロツケ揚りけり
夏羽織風に吹かれて去りにけり

菅 沢 陽 子

葉柳やマドンナ待てる人力車（道後）
駕籠昇の阿吶の息や汗光る（こんびら宮）
皿鉢料理一会にすすむ冷酒かな
土佐電に「後免」の駅や日の盛り
帆立貝の活きある証刃を噛めり

増 田 大

梅雨ごもりうつけを払ふ厨ごと
鮎一匹こんがり焼けし一人の餉
踏煮るやみちのく育ちの知恵を借り
小回りを利かす立居や金魚玉
何ごともらしくありたし茄子の花

五月雨や腰据ゑて研ぐ篆刻刀
挨拶にとどめて去りし日雷
炎天や地は静けさを極めたる
ボタン押すくらしに狎れし原爆忌
自販機のコーラどすと原爆忌

春燈の句

鈴木 榮子選



胃の調子今日はよく合ふところてん

東京 藤田 信義

終戦日おのが掌におく遺書遺髪（わが六十年）

父の日の子の子の小遣ひ用意でき

参道は焼だんこの香と老鶯と

東京 佐藤 玲子

炎天や救急警報にしひがし

里山の夏鶯の機嫌よし

せまき庭なんと鮮やか未央柳

ほととぎす鳴声談義となりにけり

ガジユマルの幹の弾痕沖縄忌

神奈川 伊東 湘三

万緑の大吊橋を渡りけり

帰省の子待ためそぶりに待ちにけり

絶句せり茶室の露地を蛇よぎり

岡山 蒲生 静江

留めたる美男の名残紺上布

刈りし藻を日暮れて集む媪かな

とある日の父の本音や墓洗ふ

雨戸閉める時に気の付き梅雨の月

水昏し流れては逢ふ螢の灯

千葉 中嶋 昌子

靴を干す前を蜥蜴の走りけり

風青し洗ひ上げたる網戸より

津軽弁聞きつつ開く花りんご

東京 依藤 正克

タブレット渡す小駅や昼顔咲く

青田風女駅長拳手の礼

家居して雨こそよけれ濃紫陽花

梅雨寒や義賊と毒婦寄り添ひて

時の日や刻にかかはりなき齡

静岡 徳永 辰雄

磔刑の消えて絞首に五月雨るる

雉鳩ののんど口こもる梅雨入かな

雷鳴に返事の名乗り打消さる

東京 渡邊 泰子

天罰は甘受するもの青時雨

黒門の弾痕ほどに枇杷実る

余言

鈴木 榮子

梅雨ごもりうつけを払ふ厨ごと

市川 玲子

日本は梅雨で外国には雨期とか乾期があります。梅雨はまことにうつつうしい時期です。特に籠るわけではありませんが雨ではそう外出も出来ません。そんな憂鬱を打ち払うために厨ごとに精を出したということです。

体を動かすと気分も晴れるので厨ごとでも、庭へ出でのストレッチでもして鬱気を払いましょう。
同作者の句に、

何ごともらしくありたし茄子の花

市川 玲子

らしくありたし、常にそう思っています。切に同感。一句から五句目まで揃っていました。

葉柳やマドンナ待てる人力車(道後)
土佐電に「後免」の駅や日の盛り

菅沢 陽子
"

このマドンナは漱石の小説から来ているマドンナ中のマドンナ。これは軽々に置いたマドンナではありません。
二句目「後免」の固有名詞がなぜか利いていて妙。

ボタン押すくらしに押れし原爆忌
自販機のコーラどすんと原爆忌
増田 大
"

広島島の原爆ドームはまだ見ていませんが、あゝ許すまじ原爆を、三たび許すまじ原爆を、です。
合掌

二句目、自分でコインを入れておきながら「どすん」という音に驚きます。まさにどすんと落ちています。

竹に花胸三寸に納めけり
宮地れい子

季語の「竹の花」に眼を奪われている間に、ことは胸三寸に納められてしまいました。見事に納まりました。

潮風と遊びし髪を洗ひけり
横田 初美

髪を洗うということはちょっとした癒しです。出来たら毎日でもセツトしたい。髪は顔の額ぶちです。

この五句も揃っていました。前にも触れたようにマラソン集団で競技場に戻って来たグループ十人に差違はありません。